

卷頭言

病院管理者 平 幸 雄

仙台市立病院医学雑誌第19巻の刊行にあたり卷頭の言葉を述べたいと思います。その内容を見ますと医師部門の原著、症例報告は例年と変わらず、コメデカル部門からの多くの投稿に目が引かれました。皆の努力が偲ばれます。編集委員の方々、本当にご苦労様でした。

昭和5年にわが病院が開院されてから、いま当院開院69周年の祝事も無事終えたところで、あらためて当院の歴史の諸々に思いを巡らしておるところです。その中の一つにこの市立病院医学雑誌の歴史も諸先輩のご努力のお蔭を頂いて今日があると言う事で感銘深いものがあります。本院の院内学術活動を見ますと、昭和12年12月に院内集談会が発足し、その理念を要約すると「患者診療に当たり最新の知識と技術で、皆で研鑽を」をもとに、昭和34年4月に待望の本誌が発刊され、昭和39年の6月まで刊行されましたが以後休刊となりました。しかし院内各位の本誌再刊の熱意は再び燃え上がりを見せ、昭和55年7月1日付を以て第1巻として刊行され今日に続いているのです。この日はわが病院が東2番丁の地より現在の清水小路に移転新築した新病院の開院の日であります。その熱意は引き継がれ、そしてここに第19巻を刊行する運びとなった事に大きな喜びを感じます。前掲の理念が忠実に引き継がれ、まさに「継続は力なり」ですね。今後の更なる研鑽を期待いたします。

医療の進歩、特に画像診断、遺伝子治療、免疫療法への取組み、内視鏡的手術など目覚しいものがあります。また2月28日にはわが国初の脳死の方からの臓器移植が行われ、歴史の大きな一ページを飾りました。しかし同じその反面、最近の医療に関わる出来事の多さには他人事とは思えない戸惑いと驚きを感じるのは私一人ではないでしょう。これまで保ち続けてきた医療の信頼を大きく揺るがせるような医療事故が続きました。医療に携わる関係者こそって傍観視する事なく信頼回復の努力を尽くして参りましょう。今、国内は経済の低迷が長期化してなかなか明りが見えにくい時世です。このような社会環境であっても医療は国民生活の基盤であることに変わりはなく、医療の質を確保し、更なる医療の効率化が求められて来つつあります。当院も情報を的確に把握し運営を心掛けて参りたいと考えております。